

「校長らが誤答児童に合図」の報道に接して

数日前にあるメル友の学生から、授業での課題である「なぜ勉強するのか」の発表のために作成したプレゼンテーション用スライドを見せてもらった。

この際と思い、今、正に学校で、勉強中の方に、また、生徒や学生に教える立場の方に、「なぜ勉強するのか」の問いへのヒントをいただければとお願いしたところ、数人から返信をいただいている。

そうした折、東京都足立区内の一斉学力テストで、テスト中に「校長らが誤答児童に合図」の報道記事。

このテスト評価問題では、障害児を採点から外していたという報道が既にあった。

一体、「校長ら」は、「なぜ勉強するのか」をどう生徒に話しているのだろうか。

単に学力テストの点数だけを気にする「校長ら」に、メル友からの次のようなヒント（抜粋）を聞かせたいものである。

・勉強って一人だけで自己完結するものでなく、係わり合いの中から高めていくものと思っています。

・勉強した結果、自身を高めていく事も大切ですが、その事を土台にして社会と繋がっていく、人との素敵な係わりあいを広げていく、支えあう一助になれば本当に素敵だなと思います。

・どんな評価も、忘れてはいけないのは、存在全体を決して評価しきれないということ。ほんの一面だけだということだ。

・学んだ知識など、簡単に忘れていきます。でも、そこで得た「学び方」や知識の使い方、事柄の覚え方、そして努力したという記憶、これは「学ぶ」ということの大きな目標のように思います。

・私は社会のために勉強するというよりも、個人の学びの積み重ねが社会のためにつながると考えています。

・大学に行くために勉強するというのもそうですが、自分の未来への可能性を広げるための勉強でもあると思います！

・私は最近、「教えようとする」ことよりも、「学びたい」という生徒のモチベーションを高めることに特に力点を置きつつあります。子どもは興味を持てば、自ら学びます。

・学ぶことが生きることのどのように反映するかを、それを教える人は、自分の思いを語るべきではないでしょうか。「受験のために学ぶ」などという答えは、教えるものとして最も情けない答えだと思います。

・一斉の学力テストをするより、小学校で、毎年学年始めに皆でわいわい“なぜ勉強するか”を子供たちに作文させて、個別の卒業文集なんかを作ったら面白いと思いました。

脚本家の三谷幸喜さんが「理数コースの高校時代、数学のテストは毎回零点だった」と書いている。恩師の「無理せず文系に進め」で救われた。三谷さんを点数で縛り続けていたら「ラヂオの時間」も「古畑任三郎」もなかった。

東京都足立区の小学校で、区の学力テストをめぐる不正があった。校長と5人の教師が、誤答している子の問題文を指さして回った。同校ではまた、保護者の了解なく障害児3人の答案を採点から外していた。

足立区は学力調査の成績を学校一覧で公表してきた。この小学校は05年が72校中の44位。不正の06年には1位になった。禁を破って前年の問題をコピーし、学校ぐるみで練習を重ねた成果らしい。テスト業者と設問が一新された今年は59位だった。

区教委は学校を競わせ、区の学力を底上げしようとした。校長は点取り競争に走った。指導力を採点されると考えたのか。トントンと児童に合図を送る姿は、粉飾決算に精を出す社長のように物悲しい。残ったのは基礎学力ではなく、教育不信の赤字である。

お茶の水女子大の耳塚寛明教授は「学力調査は利点が副作用を上回ることが条件だが、こうなると毒薬だ」と語る。弱い分野を見極めるという薬効は、正しく服用してのことだろう。

今春、43年ぶりの全国学力調査が行われた。統計上は、日本の公立小中学校を縦一列に並べるだけのデータがそろふことになる。だが、個性は一列に並ばない。「横」に出るべきあまたの才能が、点数に縛られ、列の中で立ち枯れることを恐れる。